

1. 絵解きの老舗、善光寺

絵解きとは題材となる絵を指示しながら、その内容を口頭で解説し、物語を語る行為をいう。絵解きの対象は、物語を絵画化した寺社縁起・霊験利益・祖師高僧伝・英雄武将伝・地域伝説や、説教的な地獄絵・涅槃図・曼陀羅など多岐にわたり、聴衆に直接与える布教手段として普及した。

(1) 絵解きを広めた^{ひじり}聖たち

① 熊野比丘尼^{くまのびくに}

平安時代末から鎌倉時代にかけて絵解きは芸能としても発展した。特に有名なのは熊野比丘尼（びくに）と呼ばれる尼僧で、熊野信仰が絵解きされた。全国に広がった熊野比丘尼は、善光寺にも活動拠点を持ち、女人救済の善光寺は女性宗教者が活動する場でもあった。元善町の熊野社や大門南の熊野神社がその名残。

長野市大門南の熊野神社



② 高野聖^{こうやひじり}

鎌倉時代の高野山は浄土信仰が盛んで、念仏行者としての高野聖たちが拠点としていた。室町時代には時宗化して、善光寺聖と類似した性格を持ち、どちらも時宗の開祖一遍にゆかりの地であることから、両方を兼ねた聖も存在していた可能性がある。こうした背景が高野山と善光寺に共通する「刈萱道心と石堂丸親子の物語」の絵解きを生んだものと考えられる。



絵解き「刈萱道心行状曼陀羅」の寺として有名な刈萱堂密厳院(和歌山県高野町)

③ 善光寺聖^{ぜんこうじひじり}

中世から善光寺聖により「善光寺縁起」の絵解きが盛んに行われた。江戸時代には出開帳の際に「絵縁起の講談」と呼ばれ、善光寺大勧進には「絵伝場」という部屋があり、近代まで参拝者に絵解きが行われていた。また、善光寺大本願宿坊の一つ、淵之坊は「縁起堂」といい、代々「善光寺縁起」を絵解きしてきた。現在も中世から江戸末期まで、時代の異なる4組の絵縁起を所蔵している。



縁起堂淵之坊

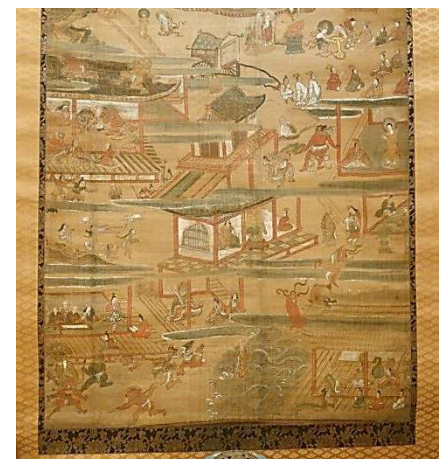
(2) 善光寺巡礼の道の絵解き

① 善光寺縁起

縁起とは寺院の成り立ちを解説した物語。善光寺縁起は平安時代後期には成立していた。これを絵図にしたものが「善光寺如来絵伝」と呼ばれる縁起絵図。善光寺縁起は今日まで約80種類存在し、「善光寺如来絵伝」も中世以前が7本(国重文3件)確認されており、それ以外のものを含めれば、やはり全国に相当数現存すると思われる。

【所蔵寺院】

- 元善光寺(表紙の写真、現在絵解きは行われていない)
- 善光寺<大勧進・大本願・淵之坊・吉祥院>



淵之坊の善光寺如来絵伝(室町時代)

② 釈迦涅槃図

釈迦の誕生から入滅までの「釈尊八相物語」（江戸時代）のうち、入滅の場面を描いたものを「釈迦涅槃図」という。悟りを開いてから45年間にわたる説法を終え、いよいよ死期を悟った八十歳の釈迦が、静かに臨終を迎える情景が描かれている。

【金峯山龍福院長谷寺（長野市篠ノ井塩崎）の絵解き】

「釈迦涅槃図」一幅；江戸時代中期～後期制作・作者不明・縦230cm×横200cm

口演；平成10年（1998）小林玲子氏により絵解きされる。平成12年（2000）住職夫人岡澤恭子氏が涅槃図の絵解きを復興する。



涅槃図の絵解きをする岡澤恭子氏（長谷寺）

③ 六道地獄絵

六道とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天界の輪廻転生する六つの世界をいう。地獄絵の類はかつて正月の15・16日の両日と盂蘭盆会うらぼんえの7月15・16日に「地獄の釜の蓋が開く」時に絵解きされた。

【苺萱山寂照院西光寺（長野市北石堂町）の絵解き】

「地獄曼陀羅」六幅；江戸時代中期制作・作者不明一幅・縦129.5cm×横56.5cm

慶応2年（1866）修復開眼供養

平成3年（1991）再修復開眼供養

口演；平成3年（1991）先代住職夫人竹澤繁子氏により復興。平成19年（2007）現住職夫人、環江氏が後継。現在は8月12日「お花市」に口演。西光寺は縁起物語『苺萱道心石堂丸親子御絵伝』を絵解きする寺として知られており、近年はフランスで絵解き口演を行うなど、絵解き文化の発展に貢献する。



六道地獄絵を絵解きする竹澤環江氏（西光寺）

④ 刈萱親子御絵伝

刈萱道心・石堂丸親子の物語は、霊場高野山を舞台に、高野聖の妻子への恩愛と仏道心との葛藤と、女人禁制の掟の悲劇として長く語られてきた。高野聖によって伝播されたこの物語は、謡曲『刈萱』となり、室町時代には広く人々の知るところとなった。

【刈萱堂往生寺（長野市往生地）の絵解き】

「刈萱親子御絵伝」二幅；江戸後期制作・作者不明一幅・縦138.5cm×横71cm

明治18年（1885）の改装

口演；水野善朝師・住職夫人恒子氏。先代、先々代ともに住職夫人により絵解きが相続されてきた。先代住職第41世水野善豊師の筆録した絵解き台本を所蔵する。



水野恒子氏による絵解き（往生寺）

⑤ 長野における絵解き文化復興運動

長野郷土史研究会は、絵解きの研究と実践による絵解き文化の復興を全国に先駆けて行ってきた。その発端は小林一郎氏の『善光寺如来縁起』（銀河書房 1985）刊行である。この本がそれまで概略しか知られていなかった「善光寺縁起」の詳細を明らかにした功績は大きい。これを基本に絵解き台本の創作がなされ、小林玲子氏の格調高い絵解き口演の復興へとつながった。両氏による絵解き文化の復興は、無形文化財としての観点から、高く評価されるべきである。

小林一郎、玲子両氏は平成5年（1993）の「善光寺如来絵伝」をはじめ、「釈迦涅槃図」「当麻曼陀羅」「道元禅師御絵伝」「熊野観心十界曼荼羅」など、多方面の絵解き復興に尽力してきた。先進的な取り組みは全国的にも認知されており、熊野での「熊野観心十界曼荼羅」の絵解き口演や、各地に残る絵図の絵解きを依頼されるなど、県内外において絵解き文化の継承者としての実績を重ねてきた。

近年は新しい絵解き絵図の制作にも取り組み、平成26年（2014）絵師尾頭氏による『善光寺参り絵解き図』が完成。100の物語を一枚の絵に盛り込むという斬新な手法で、絵解き文化に新たな1ページを加えている。

平成28年（2016）には江戸時代に善光寺の土産物として販売された『三国伝来之図』（2枚組木版摺り彩色）を複製し、文語体による七五調の台本を制作。再び両氏の原点である「善光寺縁起」に取り組んでいる。

昨年「長野の絵解きを広める会」（小林玲子代表）を発足し、今年は3～4月にかけて2ヵ月間、善光寺を中心に長野市周辺における10箇所で開催された。

小林一郎氏、玲子氏による絵解き文化復興運動により、今や長野はその先進地となった。今後は善光寺巡礼の道において絵解き復興の広がりを期待したい。



「善光寺如来絵伝」(原画 75×26 cm 竹風堂蔵)